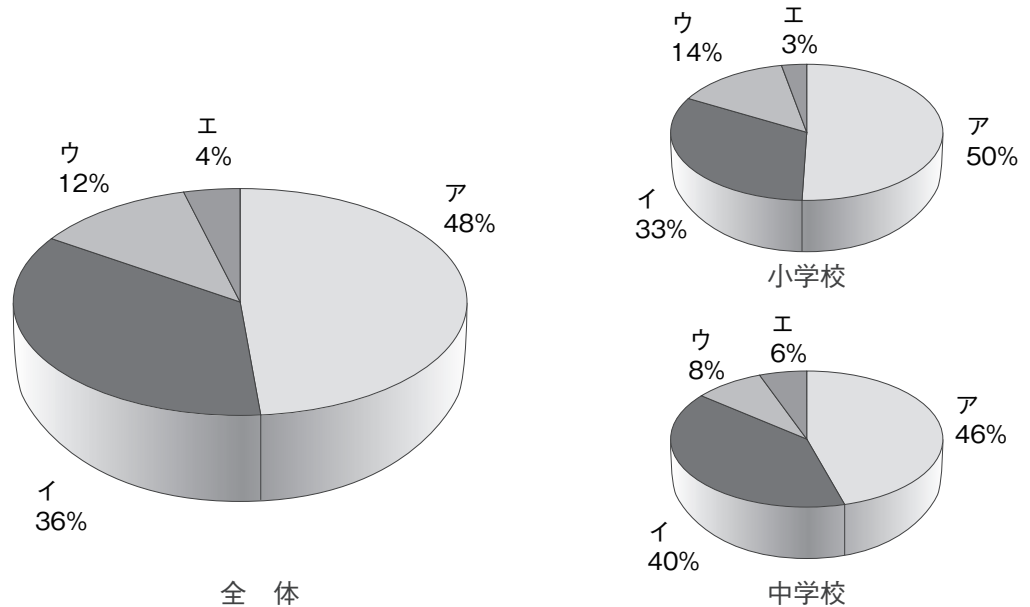



Ⅲ 週休日の過ごし方についてお聞きします。

**設問18 週休日、あなたは、家で学校や学級の仕事（事務処理、教材研究、児童生徒への連絡、計画書の作成等）をすることがありますか？
（1つ選択）**

- ア よくある
- イ たまにある
- ウ あまりない
- エ まったくない

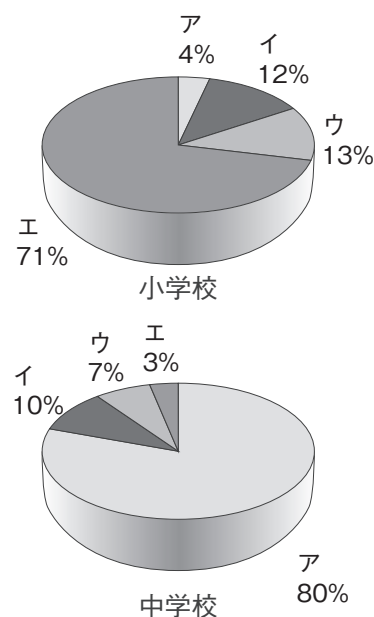
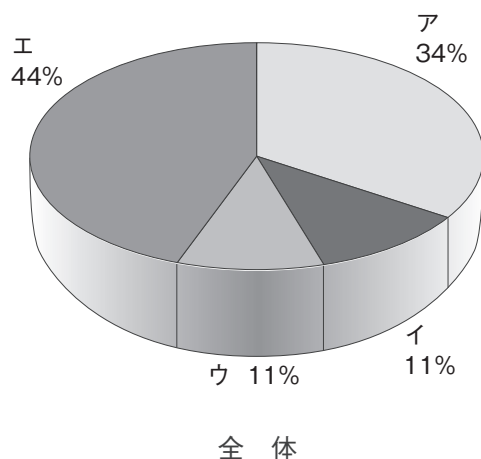


 **週休日、持ち帰り仕事をほとんどの教員がしている。
（前回よりわずかではあるが「ない」割合が増えている。）**

- 週休日にも持ち帰り仕事がある、これが現実である。
学校週5日制以前と比べたらどうなのであろうか。今また、土曜授業復活の話題もでていいる。現に土曜授業を実施している自治体もある。校外の研修（教育だけでなく他の諸々の研修も含めて）に使うことは、時には大切であろうが、基本的には自由に週休日が使える状態を維持したいものである。
- 学校週5日制以前はどのような状態だったのか。そして、現在は？
以前、土曜日は子どもを帰してから昼食をとる。そして、残り仕事をやったり、部活指導をやったりした。帰宅は平日の退勤時刻とほぼ同じであった。多忙ではあるが、仕事も時間をかければ何とか終わるものだった。
しかし、現在の多忙化は、対人的に神経を細かく使わざるを得ない仕事が増え、質が違ってきている。それだけ、現在の多忙化は、疲れ果てて精神を病むようなものになりつつあり、精神疾患で休職・離職する教員は増加の一途をたどっている。

**設問19 週休日、あなたは、学校に出かけて部活指導（各種大会参加・練習試合を含む）をすることができますか？
（1つ選択）**

- ア よくある
- イ たまにある
- ウ あまりない
- エ まったくない

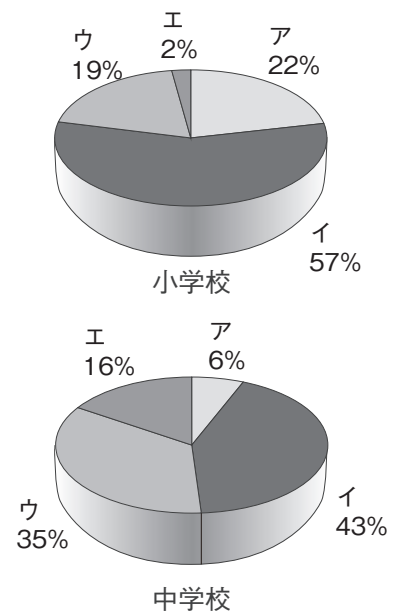
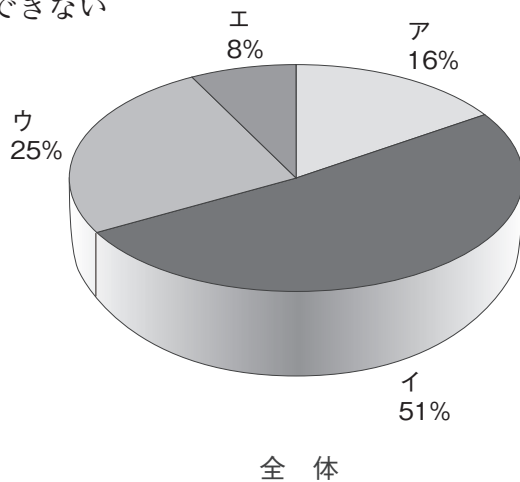


**部活動は、小学校・中学校で大きな違いがある。
週休日の部活指導に熱心に取り組む中学校教員が多い。
小学校教員は週休日の部活指導は約30%であり、少ない。**

- 小学校の週休日の部活指導はほとんどなくなった。（授業日もない学校が多い）
社会体育や地域活動に移行した。反面、まだ部活動を行っている学校もある。小学校教員で部活指導をしたくてもできなくて残念に思っている者も一部にいるかも知れない。
問題は中学校の部活動である。外部指導者の導入も始まっているが、全体に適用される状態には至っていない。新潟市教育委員会では中学校部活動の実態調査を基に提言を行うという。
- 中学校の部活動の社会体育化や特域活動への移行は、なぜ進まないのか。
部活動がうまくできない、多大の時間がとられると負の側面が語られる部活動であるが、本質の問題があまり語られないように思われる。文科省も教育委員会、中教審でもなかなか結論はでない。いわば、グレーゾーンにあるということが出来る。
- 若手教員に部活指導の負担が大きくなっている。
教員構成上、どうしてもそうならざるを得ない現状である。ただでさえ教員構成は逆ピラミッドである。このままでは将来に禍根を残すことになりはしないか。喫緊の課題である。

**設問20 週休日、あなたは、心身のリフレッシュができますか？
(1つ選択)**

- ア 十分できる
- イ 少しできる
- ウ あまりできない
- エ まったくできない

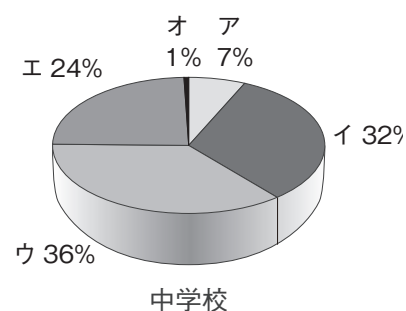
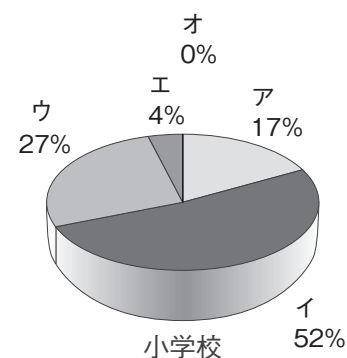
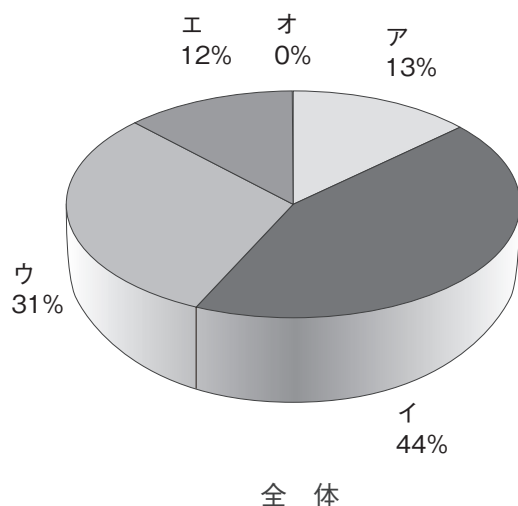



**👉 週休日のリフレッシュは、小学校・中学校で大きな違いがある。
小学校教員は80%近くの教員はリフレッシュできている。
部活指導の影響が大きく、中学校教員はリフレッシュすることができていない
傾向にある。**

- 「休日でリフレッシュして、明日からの仕事に立ち向かう」ことができるようにしたい。
休日に静養することは、当たり前のことである。しかしながら、当たり前のことができない
実態が今の学校にはある。
- 中学校教員の多くが、週休日も部活指導に従事しており、頭の下がる思いである。
ただ、部活動に関しては、大きく分けて2種類の教員がいると思われる。
 - 多忙感なく、部活指導を意欲的にやっている。
 - 多忙感を感じ、部活指導はやりたくないが、責任や義務でやっている。
 部活動については、文科省でも具体策を提示し始めた。全国で部活動指導員として4,500人
を配置することを決定した。(新潟日報17.12.23) その効果を期待したいが、全公立中学校、す
べての部活動に及ぶのはいつになるのだろうか。いずれにせよ、部活動の問題は本音で解決し
なければならない。

**設問21 週休日、あなたは、趣味を楽しんでいますか？
(1つ選択)**

- ア 十分楽しんでいる
- イ 少し楽しんでいる
- ウ あまり楽しんでいない
- エ まったく楽しんでいない
- オ その他 ()

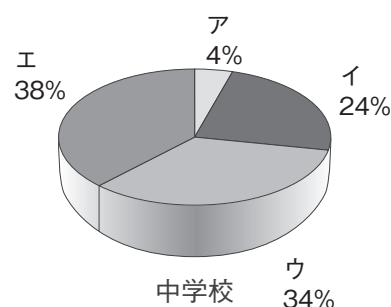
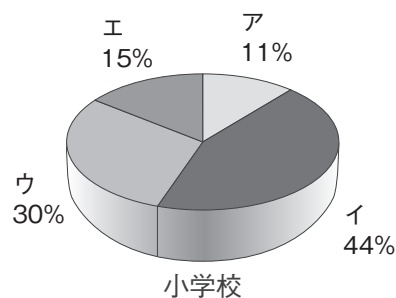
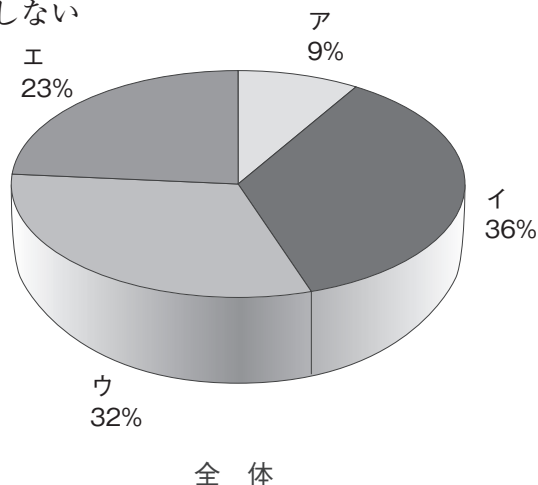


-  **週休日、半数以上の教員は趣味を楽しんでいる。
小学校教員は「楽しんでいる」割合が前回と比べ減少している。
中学校教員は、60%が「楽しんでいない」(前回と同じ割合)**

- 趣味をもって、人生を楽しみたいものである。
趣味を楽しみたいのに、学校の仕事に忙しく楽しめないという実態がある。しかし、「忙中閑あり」ということわざにもあるように、魅力ある教員であるためにも、趣味を楽しみたいものである。
- 子どもたちの豊かな体験を考えると、教員の体験にも目を向けなければならない。
「豊かな体験をもたない教員が、子どもたちの豊かな体験をはぐくむ教育を推進できるだろうか。」と問われたとき、反論はしにくい。休日だけでなく、勤務日でもゆとり(精神的余裕)をもって生活することが、当たり前ながら大切である。

設問22 あなたは、週休日に開催される地域行事（地域の祭りやイベント等）に参加していますか？（1つ選択）

- ア よく参加する
- イ たまに参加する
- ウ あまり参加しない
- エ まったく参加しない



地域行事への参加は低調である。特に中学校教員が低調である。教員としての立ち位置を考える必要がある。

○一市民（社会人）としての当然の行為をどうとらえるか。

「一市民・地域住民」としてやる。これに尽きる。

単身赴任をしている（土日はいない）、地元ではなく仮の住まいである、などさまざまな立場・境遇からくる個々の事情はある。しかしながら、教員は地域から見られているのである。

教員（現職、OBを問わず）の中には、町内会の役員をやったり地域コミュニティの中心を担っていたりする人も少なからずいる。

○ 教員にとっての2つの地域をどう考えるか。

教員には、自分が住んでいる地域（生活地）と学校のある地域と大きく2つの地域がある。

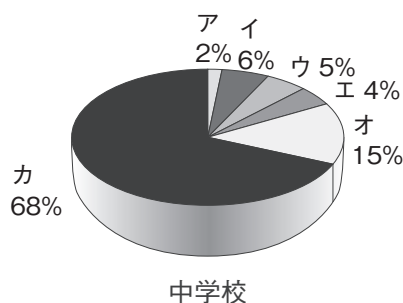
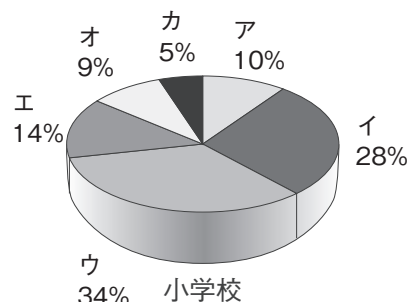
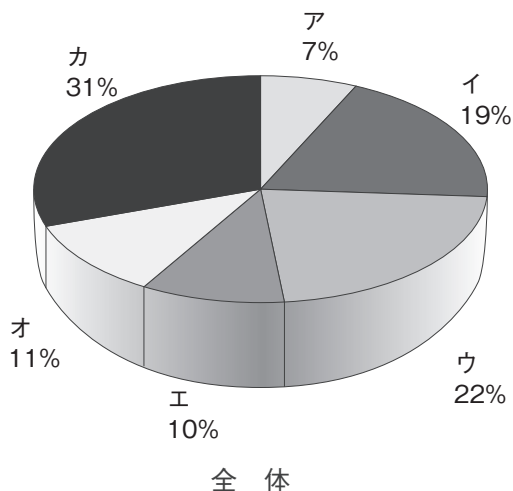
現在、学校のある地域で行事がある場合、担当教員や一般教員に参加が求められることは少なくない。社会に開かれた教育課程が求められる中で、今後その比重が増していくと考えられる。

自分が住んでいる地域（生活地）の地域行事に参加することは、地域住民として最低限の役割ととらえるべきではないだろうか。

設問23 1か月の週休日のうち、あなたは、研修会参加や部活指導等で何日くらい家を空けますか？（1つ選択）

注）家を空ける時間が1時間や2時間と短い場合も1日としてカウントします。

- ア 0日
- イ 1日程度
- ウ 2日程度
- エ 3日程度
- オ 4日程度
- カ 5日以上



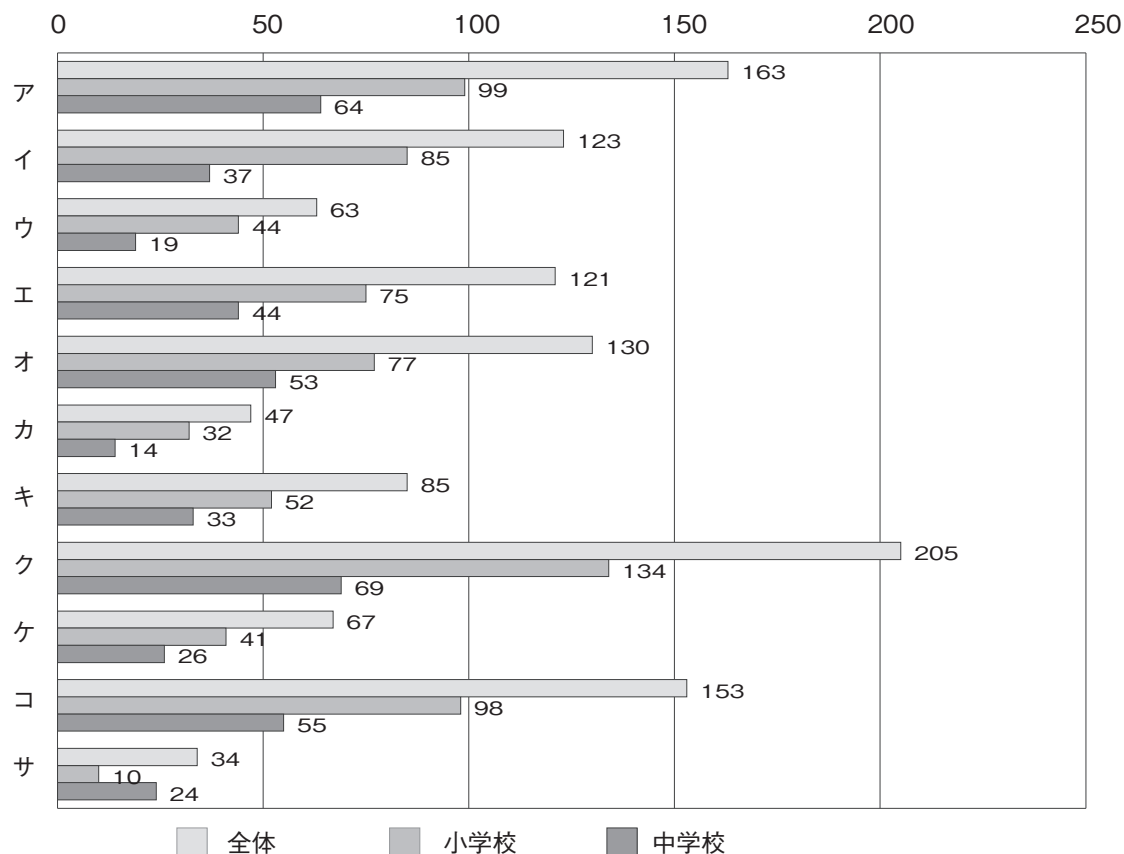
週休日、「家を3日以上空ける」のは全体で半数程度である。

小学校、中学校で大きな違いがある。中学校では5日以上家を空ける教員が70%近くを占めている。

- 部活指導の有無により、小中学校で大きな違いがある。
中学校教員の中には部活指導に悩み、負担に感じている者も少なからずいる。新潟市ではようやく部活指導の実態調査や提言を行うことを市議会で明言したが、遅きに失した感も否めない。
小学校の部活動は縮小の傾向にあるが、具体的なデータはないようである。
- 週休日の部活指導について
中教審答申素案では、「勤務時間の上限の数値目標を示したい」としている。（平成29年11月29日付け新潟日報）週休日の部活指導は、週休日のうち1日とするともいわれている。つまり、週休日に教員特殊業務手当で部活動の指導をし、授業日は勤務時間終了後無償で指導する（働く）というのが実態である。

**設問24 週休日、あなたは、どんなことをして過ごしていますか？
(3つまで選択可)**

- | | |
|----------------|------------------|
| ア ゆっくり眠る | キ テレビやスポーツを楽しむ |
| イ 趣味を楽しむ | ク 家族や友人と一緒に過ごす |
| ウ 研修会に参加する | ケ ショッピングやグルメを楽しむ |
| エ 教材研究や授業準備をする | コ 家事や育児をする |
| オ 何となくのんびり過ごす | サ その他 () |
| カ 読書や健康づくりをする | |



週休日をどのように過ごすかは本人の意思であり、自由である。

しかし、敢えて述べたい。

「読書する教員が少ない。」ことが気にかかる。

中学校教員の「部活動」や「業務処理」のための出勤が多いことが気にかかる。

○ 新潟県の小中高校生の読書実施率は全国最低に近いレベルである。

『データで読む 教育の論点』前掲 p.199から、新潟県の児童生徒の「趣味としての読書実施率」は、全国で最下位の位置にいたることが分かる。

小学生…40.4% (46番目…最下位から2番目) 中学生…46.4% (34番目)

高校生…33.3% (44番目) * 中学校で上昇するが、高校でまた下落する。

さすがに教員の読書実施率調査というものはないが、子どもたちの実態から教員の实態も推し量られると言われ兼ねないだろう。教員の学校居残り時間から察するに、週休日しか読書する時間がない状況にあるように思われる。